

研 究 情 報 (Information)

38th International Liège Colloquium on Ocean Dynamics

リエージュ, ベルギー
2006年5月8日~12日

リエージュはベルギー東部の古都であるが、リエージュ大学には海洋学修士課程の教育コースがあることから、海洋学に関する国際コロキウムを毎年開催している。2006年のコロキウムは「海洋生態系における動物プランクトンの役割 Revisiting the role of zooplankton in pelagic ecosystem」のテーマで、5月8日~12日の期間に開催された。

今回のコロキウムの主催者は、海洋生態系のモデリングが専門の Jean-Henri Hecq 博士であった。参加者総数は100名弱と小規模であった。そのうち8~9割がヨーロッパの動物プランクトン研究者で、アジアからの参加は私の友人である中国の Sun Song と私の2人のみであった。プログラムは下記の8セッションで構成され、それぞれ講演(1会場)とポスター発表があった。特にドイツ GLOBEC メンバーによる一連の「北海・バルト海的环境要因-動物プランクトン-魚類の相互関係に関する研究」の発表は、ドイツ流の堅実なアプローチがなされており聞き応えがあった。

- 1) Roles of the different zooplankton components in controlling pelagic food webs: respective roles of micro-, meso- and macrozooplankton, gelatinous predators, and mixotrophs
- 2) Influence of long-term changes in physics and climate on the abundance and diversity of zooplankton
- 3) Influence of small scale physical variability on the behavior, dynamics and spatial distribution
- 4) Adaptation to specific environments
- 5) Role of zooplankton diversity and abundance on the recruitment of fish; Influence of predators on zooplankton and pelagic systems
- 6) Effects of zooplankton on biogeochemical fluxes
- 7) Recent developments in zooplankton modeling
- 8) New technologies

参加者が少ないことが結果的に時間的余裕を生み出し、1講演は質疑応答を含めて30分が割り当てられた。そのため、発表者は通常の学会発表より情報をたっぷりと盛り込んで、しかもゆっくり話ができ、多くの質問に答えることができた。日本の学会も含めて昨今の学会では、時間的制約により発表内容が消化不良のまま次々と講演が進むことが多いが、会場の全員が納得するまで質疑応答を行った今回のコロキウムは、最近では経験しなかった新鮮さを感じられた。私はこのコロキウムに二つの目的をもってきた。一つは「東アジア縁海域のクラゲ大量発生」に関する発表をすることであった。発表後多くの質問が出て壇上からなかなか降ろしてもらえなかった。もう一つの目的は2007年に広島市で開催する「第4回動物プランクトンの生産に関する国際シンポジウム」の宣伝であった。日本からポスターを持参し、勧誘に努めた。当初の目的は達せられたものと自己評価している。

ベルギーでの国際会議への出席は初めてであった。散歩途中で出会った地元の人々は皆人懐っこく親切であった。郊外の古城で行われたシンポジウムディナーは大したことなくあったが、ホテルの朝食に出たパン、コーヒー、チーズ、ヨーグルトなどはどれも美味しかった。

上 真一 (広島大学大学院生物圏科学研究科)